

---

# 喜怒哀樂

Kanori

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喜怒哀楽

### 【Zコード】

Z7334C

### 【作者名】

Kanori

### 【あらすじ】

いじめにあつっていた桜。変えられない自分。涙は止まることを知らなかつた。でも、止め方を教えてくれる人達との出会いで、桜は大きな一步を歩み出した。

## 止まらない涙

私は、自分が悲劇のヒロインだとでも思っていたのかもしれない

私は、小学6年生。課外のミニバスケット部員だけど、長身つてだけで入りたくもないのに無理矢理入部させられた。

「桜ー！」

私を読んだのは夏末。色白で顔立ちも良く、男子から何度も告白されたのを見たことがある。

その横には、杏里と心がいた。杏里はスポーツ万能のバスケ部キヤプテン。心も、可愛い顔で人気があった。

愛想がいい3人は、大人達からも好評で、いつも笑顔で褒められている。

でも、3人には裏があった。私をいじめて楽しんでいた。所詮、小学生の遊びでしょ？って思うかもしれないけど、どんどん私の心と身体はボロボロになつていったんだ。

「おはよう…」

「はあ？聞こえないんだけど、何て言った？」

「おはよお…」

「何キレイなんの？ウザいんだけど。」

「キレイないよ？」

「キレイでんじゃん！謝つて。」

「えつ？何で…」「いいから謝れつてば…！」

「ほら、桜のせいで雰囲気悪くなつたじゃん。もういい一日

一日、桜の事無視しよう。」

こんな会話が毎日続く。他の友達とつるめばいいんだろうけど、

前に他の友達と遊んでいたらその子の家まで来て、私が乗ってきた自転車のかごにゴミをいれて帰つて行ったことがあって、その後の日には…さつきみたいに口攻めにあう。

そういうのに会わないので大人しく従つて、こんな人たちでも良いところはあるんだってプラス思考に考えて、過ごしていた。所詮、人間なんて一人。先生なんて頼れない。私が精神的に弱つて、保健室で涙流していた時も、担任は泣いているとこを見て、笑つていた。

ボールをぶつけられるのなんて当たり前。

「自殺の場所決めたー？」

「桜あ、おごつて」

「ねえ、好きな人をこつから大声で叫んだら？」

「早く死ねよー」

「まだ生きてたの？」

「ウザイ」

何度も言われてきた言葉。あいつらは、飽きずに毎日言つてくる。ちょっと可愛いペンとかをもつてくるとすぐ没収。正確には、「貸してー」といいつつもどつてこない。

こんな毎日。やつとのおもいで卒業。卒業すれば何もかも終わってしまうと思つていた。

今までの事も、思い出になると思つていた。

でも、そんなに世の中甘くない。仲良し4人、そろつて桂中学校へ入学することに。”今”しか考えていなかつた私は、中学校生活の楽しい姿を夢みていた。

私は自動的にバスケ部へ入部した。1年は111人。1学年100人位にしては多いほう。

メンバーは、沢村、瞳、香織、明、のり、菜々子、ゆうか、夏末、杏里、心。沢村は、ずっと理由つけて部活をサボり、いつの間にか退部していた。

バスケ命つて感じの杏里と、練習嫌いだけど才能の持ち主夏末がチームを引つ張つていた。

明は、レギュラーになれないのが嫌で、他中へ転校していった。

先輩達4人は素人だったから、私たち1年がレギュラーになつ

た。成績は市でベスト4ぐらい。なかなかの強豪チームだ。でも、チーム内はドロドロしていた。もともと氣の強い、杏里と夏末とで別れてしまっていた。

なぜ、そんな亀裂がはいつたかというと、杏里が練習中はもうろん、普段からの自己中がすごかつたから。

杏里が原因で、みんな退部していつて、杏里、菜々子、ゆうか、私の4人が残つた。

みんなから言えば、杏里が嫌いなら辞めちゃえればいいと思うでしょ？でも、それは逃げにつながる。そんなのは絶対に嫌だった。

中学校に入つて、周りの環境が変わつて私の性格は変わつてたのかもしない。無愛想で、友達なんて興味ないなんて感じ。そんなだから、周りに人がいなくなつていく。休日も一人、学校では友達いるけど、親友と呼べる人がいない。

自分が嫌いな私。自分を変えたい私。自分を変えられない私。もう、どうしたらいいか涙が溢れてくる。

涙は止まることを知らない。

でも、知らないなら教えてあげればいいわ。

独りの私に、あいつは言つてきた。それは、戸川 喜徳。とがわよしのり話したことがあつたけど、あんまり関わりのない関係。

だけど、昼休みに独りで屋上にいた私は、喜徳の言葉に感動してしまつた。

「だいたいさあ、お前は周りに近寄らさないオーラを放つてんだよ。」

はあ？さつきの感動が台無し。

「意味分かんないんだけど。」

「そのまんまだよ。いじめられてたかなんだか知らねえけど、そんな性格だから友達少ねえんじゃねえの？そんなんじゃ誰も友達なんかにならねえよ。」

ぶちッ何かが切れる音。

「はあ？ 誰も友達なんかいるなんて言つてないし！ ！ でかんた何なのさつ何にも知らないくせに知つたような口してさあ。あんたが私の何を知つてるって言うの？ 何にも知らないじやん。そもそもあなたに、私が友達少ないなんて関係無いでしょ…」

「なんか知らないけど、たくさん言つてしまつた…」

「？？？ 何故か笑つている喜徳。

「なにわらつてるの？」

「いやあ、あんたがこんなに話すなんて予想外だ。お前、いや桜。俺、桜の事気に入っちゃつた 付き合おう」

「私は、教室へと走つていつた。何なんだろうこの気持ち。まさかあんな展開になるなんて思つてなかつたから、ドキドキが止まらない。私は1組、あいつは3組。授業で一緒になることはない。

「どうしたの？ 頬真っ赤だよ！ 熱あるんじやない？」

「ありがとう。でも大丈夫だから。」

少ない友達の一人、菜々子。杏里の前では話さないけど、普通に接してくれる。

あッそういうえば、部活引退しました！ なかなかの好成績で県では有名校！ なはず。部活に入つてよかつたつて思うことは、菜々子とゆうかと仲良くなれたこと。自然と杏里達は私の事をいじめなくなつたけど、目も合わさない。

「何かあつたでしょ！」

「何にもないよ～」

そんな普通の会話ができる事がすぐ幸せ。

「桜ツ」

呼ばれたほうには喜徳が… 私は黙つてついていく。

「俺、本気だから。いつも見てた。逃げないで頑張つているとこう。そういうのすぐになつて思つていたんだ。だから、思い付きであんなこと言つたわけじゃないから。よかつたら俺と付き合つて下さい。」

涙がでてきた。「

「本気で私と向き合つてくれる人なんていないと思つてた。すぐ喜徳と会えてよかつた。もしよかつたら私に涙の止めかた教えてください」

「それって○kって事だよね？」

「馬鹿あ。そうに決まつてるじゃん！」

幸せいっぱいの私。喜徳は私を本気で好きになつてくれた初めての人。

この幸せが續けばいいな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7334c/>

---

喜怒哀楽

2010年10月28日06時47分発行